馬琴読本と豫讓の故事

中尾和昇

はじめに

馬琴読本を概観するに、御家の難義に立ち向かう忠臣の姿を描いた作品が多いことに気付く。彼らは艱難辛苦の末に仇敵を討ち、主君[1]の身替りとなって命を落とすこともあった。濱田啓介氏[2]が指摘するように、読本は本来の秩序への回帰へと向う文学であり、その原動力の一つが、幾多の困難を乗り越える忠臣の活躍である。ゆえに、団円に至るまでの彼らの苦悩や葛藤を描くことは、小説構成において重要な意味をもつ。

馬琴は、自作において如上の忠臣を造型するに際し、中国春秋時代晋の士豫讓をしばしばモチーフとした。豫讓は、主君智伯の仇趙襄子を討つために、身体に漆を塗って姿を変え、炭を呑んで声を潰すなどして奔走する忠臣・義士として知られ、近[4]世文学への影響も大きい。馬琴は当初、仇討の完遂を以て結末とする作品に豫讓の故事を利用していた。しかし、執拗に襄子を狙っては失敗を繰り返す豫讓像との乖離を感じたためか、仇討が空虚な行為であるという認識のもと、悲運の義士を造型していくようになる。そこで本稿では、馬琴読本における豫讓の故事を分析し、その利用態度の変遷を考察することで、馬琴の人物造型法の一端を明らかにしたい。

一．豫讓の故事

まずは、豫讓の故事について簡単に整理しておこう。古くは『戦国策』に記され、『史記』ではそれが節略される形で伝わり、『蒙求』においては『史記』の記述をさらに縮約している。ま

た、『古今事文類聚』などの類書、[5]『春秋穀梁傳』『春秋公羊傳』『春秋左氏傳』『春秋列国志伝』などの講史小説、「忠義士豫讓呑炭」などの戯曲にも描かれている。これら諸書に伝わる豫讓の故事の梗概をまとめると、以下の通りである。

晋の豫讓は、嘗て范・中行氏に仕えていたが、厚遇されなかったために去り、智伯に仕えた。智伯は豫讓の器量を知って寵遇した。ところが、智伯は韓・魏の裏切りによって趙襄子に討たれてしまう。襄子は智伯を恨んでいたので、死んだ智伯の頭蓋骨を漆で塗り固め、酒盃とした。それを知った豫讓は襄子への復讐を誓う。かくて豫讓は名を変え、厠番となって襄子の宮殿に潜入し、刺殺する機会を窺うが、用心深い襄子に見つかってしまう。しかし、襄子は亡君のために仇を討とうとする義気に感じ、豫讓を釈放する。豫讓はその後も、身体に漆を塗って姿を変え、炭を呑んで声を潰し、乞食に身を窶しながら襄子を狙う。その様子を見かねた友人は、襄子に仕えれば容易く宿願を果たせると進言するが、豫讓は二心をもって主君に仕えることはできないとして断る。やがて豫讓は橋の下に身を隠して待ち伏せるが、またしても襄子に見つかってしまう。襄子は、嘗て仕えていた范・中行氏を滅ぼした智伯を討とうとせず、かえって仇である智伯に仕え、彼の死後、執念深く自分を討とうとする理由を問う。豫讓は、智伯が范・中行氏と違って自分を国士（一国の傑出した人物）として遇してくれたので、国士としてその恩に報いるのだと言う。それを聞いた襄子は、感激しながらも、今度ばかりは許すわけにはいかず、兵士に命じて豫讓を取り囲ませた。豫讓は、もはや処罰は覚悟しているので、せめて襄子の着衣を刀で刺すことによって仇討の宿願を果たしたいと言う。襄子がそれを許すと、豫讓は三度躍りあがって着衣に斬りつけ、自ら剣に伏して死んだ。

『史記』の章題（「刺客列伝第二十六」）が示すように、豫讓は智伯の仇を討つために襄子をつけ狙う「刺客」として描かれている。ところが、都合二度の仇討は襄子によって悉く看破され、未遂に終わってしまう。最終的に襄子の着衣を刺すことで決着はつくものの、本望を遂げることはできなかった。つまり、諸書で語られる豫讓には、亡君のために奔走するも、宿意を遂げることなく命を落とす哀切な義士像が強調されていることがわかる。

管見の限りでは、馬琴読本において豫讓の故事が確認できたのは、【表】に示した七作である。以下、馬琴読本七作における豫讓の故事について比較・検討してみたい。

【表】豫譲の故事が描かれる馬琴読本

刊年	作品名	豫譲をモチーフとする人物
文化二年	稚枝鳩	余綾綾太郎
文化四年	敵討裏見葛葉	安倍保名
文化五年	頼豪阿闍梨怪鼠伝	美妙水冠者義高 唐糸
文化六年	松染情史秋七草	猫間新太郎光実 百済右衛門太郎義包 楠正元
文化七年	常夏草紙	稲城瀬二郎（丹嶋清十郎）
文化九年	占夢南柯後記	今市全介（続井順啓）
文化十一年～天保十三年	南総里見八犬伝	犬山道節（寂寞道人肩柳）

二、仇討の完遂

智伯を襄子に討たれた豫譲は、「士為二知レ己者一死」（士は己れを知る者の為に死す）と、主君の仇を討つために身命を擲つ覚悟を示す。それは、「至二於智伯一、国士遇レ我。我故国士報レ之」（智伯に至りては、国士もて我を遇せり。故に国士もて之を報ゆるなり）とあるように、国士として遇してくれた智伯の恩に報いるという彼の忠義心に由来するものであった。このことは、伊藤仁斎が『童子問』巻之中で「感激シテ殺ス身ヲ者」（感激して身を殺す者）と評していることからも察せられよう。ただ、前節で述べたように、豫譲は主君の仇討に失敗してしまう。そこで馬琴は、豫譲の故事を摂り入れるに際し、仇討の完遂を以て結末とする工夫を施した。このことは、『稚枝鳩』『敵討裏見葛葉』から確認できる。

『稚枝鳩』第一編、楯縫九作は一男二女（呉松・息津・千鳥）を連れて江の嶋弁財天へ参詣の折、余綾福六の家に宿泊するが、大地震によって呉松と綾太郎（福六の子息）を取り違えてしまう。綾太郎を引き取ることにした九作は、弁財天の霊夢によって「獲レ鳥而吉　得レ人而凶」という予言を授かる（第二編）。その言葉通り、尼子義久鍾愛の鷹を捕獲した功により、娘息津は楯縫勇躬（義久の臣）のもとへ嫁ぐ（第三編）。その後、予言を無視して殖栗宇九郎を助けた九作は、千鳥に戯れる宇九郎を叱責するが、逆恨みされ、谷底へ突き落とされて死んでしまう（第四編）。宇九郎の居所を探るため、妻千鳥・子息赤太郎とともに京都に到着した綾太郎だったが、盗賊と誤認されて捕まる。その間に赤太郎は餓死し、千鳥は入水する。解放された綾太郎は妻子の死を知って悲嘆に暮れ、「豫譲が志に擬し、肚かき破りて死するにしかず」と、刀で宇九郎の「蓆帽」を「寸々」に切り裂き、「肚に俤たてん」とするが、実父福六と呉松夫婦に止め

られる（以上、第五編）。

このように、仇敵宇九郎の「蓆帽」を切り裂く綾太郎が豫譲に擬えられた恰好だが、彼は豫譲のように自害せず、福六・呉松夫婦との邂逅によって命を繋ぎ止めた。ところが、「義のおもむく所いかにともしがたし」と、仇討に逸る綾太郎は、父祖伝来の刀を携えて出発するも、途次で宇九郎らに遭遇した際、刀が「冴つきて」抜けないため、返り討ちに遭う。これは、福六の後妻専（宇九郎の実母）の計略で、刀の鞘に「膠松脂」が注ぎ込まれていたからであった（以上、第六編）。

感動の再会によって命を繋ぎ止めた綾太郎だったが、その死は存外に呆気ないものであった。結論から先に述べれば、彼の続命は仇討の役割を呉松へと委ねるためのものだったと考える。事実、綾太郎は専に伝わることを懸念して、呉松にのみ仇敵の名を明かし、武芸自慢により仇討の権利を争った後に義兄弟となった。そして何より、呉松は殺された九作の実子である。つまり、呉松こそ仇討を完遂するに相応しい人物なのである。また、綾太郎の役割は仇討を委ねるだけに止まらない。第十編、小瀬川の馬頭観音堂で駿馬を得た呉松は、美濃の青墓に到着し、綾太郎とその妻子の「神霊」に導かれ、仇敵の居場所を知る。呉松による仇討の完遂には、綾太郎の続命と犠牲死が不可欠であったといえよう。

一方、『裏見葛葉』において、清原定邦に仕える石川悪右衛門は、千枝丸が定邦から預かっていた二個の玉のうち、一個を砕いてしまう。悪右衛門は、もう一個の玉を盗み取り、千枝丸に責任を転嫁。定邦は玉の紛失に怒り、千枝丸を切り殺す（以上、金四）。定邦に召し寄せられた信田庄司は、玉の行方を占うが、自らの罪が露顕することを恐れた悪右衛門によって殺害される。悪右衛門は、庄司の首を奪って逃走する（以上、日五）。庄司の首を拾った安倍保名は、真葛（庄司の妻）の頼みを引き受け、葛の葉と結婚して庄司の仇討を約束する。ところが、千枝丸追善の接待風呂で悪右衛門の衣服包と取り違え、逆に婚姻の引出物（「簞笥内伝・金烏玉兎集」と「荼祗尼天の法書」）を奪われてしまう（以上、夥六）。母から千枝丸が弟であることを聞き知った保名は、悪右衛門が弟の仇でもあることを認識するが、葛の葉（実は白狐）との間に童子を儲けたため、仇討の旅に出ることができない。そこで「晋の豫譲が故事に倣」い、「被あやまちたる（悪右衛門の―筆者注）衣服をとり出し、これを仇人に擬」て、「寸々に切裂捨」る（以上、計七）。

当初保名は真葛の懇願を受け入れるも、「身を放にして男の仇人を索がたし」と、葛の葉と結婚して庄司の仇を討つことに

否定的であった。しかし、殺された千枝丸が実弟と知るや、悪右衛門を「男の讐」「弟の仇人」として「怨に怨をかさね」、復仇を志す。これにより、保名に豫譲像が賦与されることとなった。ただ、悪右衛門の衣服を切り裂く行為は、『稚枝鳩』の綾太郎のように死を覚悟してのものでなく、「しばしその怨をはら」すためであった。

葛の葉に変じていた白狐の言葉により、悪右衛門が「芦屋道満」と改名して陰陽師となっていることを知った保名は、上京して陰陽師加茂光栄に仇討のことを告げるが、帰途、一条戻橋で「荼祇尼天の法術」を駆使する道満によって返り討ちに遭う。しかし、「識神の通力」によって父の死を知った童子は、「生活招魂続命の法」によって保名を蘇生させることに成功する。その後、童子は道満との術較べに勝利し、父とともに道満を討つ（以上、月八・木九）。

仇討に出発した人間が返り討ちに遭うという構図は、『稚枝鳩』と共通するが、死んだはずの人間が蘇生し、再度仇討を実行するという点で異なる。これは、『蘆屋道満大内鑑』（五段目）[10]を典拠としたためであろう。死して本望を遂げることのできなかった綾太郎とは対照的であるが、仇討の主導権は童子にあるため、役割の委譲という点では『稚枝鳩』に概ね一致する。ただ、いずれも仇討を完遂させる結末をとったため、原話の悲哀性が損なわれる結果となったことは否定できない。

三．悲哀性の強調

『稚枝鳩』『裏見葛葉』では、豫譲像が賦与された人間の犠牲死を契機とし、結末部において、彼らが成し得なかった仇討を、別人の手に委ねることで完遂させた。ところが、馬琴は原話との乖離を感じたためか、『松染情史秋七草』『常夏草紙』では対照的に、仇討が未遂に終わる結末とすることで、その悲哀性を強調する。

『秋七草』第三、北朝に降参した父正儀が自害した後、烏と鷺が争い、十二羽の鷺が負けるのを見た正元は、十二年後（明徳三年）の南朝衰滅を予知し、楠の子孫を残すために子息操丸を遠ざける。明徳二年、赤松・葉竹山両軍に攻められて千剣破城は陥落。正元は秋野姫らとともに落ち延び、翌三年に南北朝の和睦を知るや、足利義満を討つ決意を固める（以上、第四）。そして明徳四年三月、山伏姿となった正元は、京都四条河原の田楽興行に乗じて義満を襲撃するが、失敗。奮戦の末、櫓の上で自害する。その様子を見た人々は「わが朝の豫譲にして、田横

が義を兼たり」と、正元の「忠孝勇猛」を賞賛した（以上、第六）。

「庭訓を忘却し、魔風に靡き、邪路に入」った父正儀とは異なり、「祖父正成の遺訓を守て、只顧に忠義を存」ずる正元は、「千鈞の譬」である義満を討とうとするが、「わが朝の豫譲」との言葉通り、志半ばで命を落とす。その後、正元の遺志は、子息操丸へと受け継がれていく。二体の尊像によって秋野姫と邂逅した操丸は、自らの出自を理解し、「君父千鈞の譬敵、義満を撃でやあるべき」と仇討の意志を固める。しかし、秋野姫との間に生まれた嫡子七郎は、高福院が再び吉野に起った時、南朝の大将として足利家の大軍に立ち向かうも、奮戦むなしく、十五年後に南朝は亡びる（以上、第十）。

ここで注意したいのは、「千鈞の譬」義満を討つという結末に至らなかったことである。これは、大屋多詠子氏が指摘するように、明確な敵役が存在しないためであろう。そもそも、上記二作の字九郎・悪右衛門に比して、義満はあまりに強大な存在であり、仇敵とするには問題がある。それは、仮に義満を討つことになった場合、史実から大きく逸脱してしまう恐れがあるからであろう。『椿説弓張月』後編（文化五年刊）で、モデルとする中国白話小説を「その言、荒唐無稽に係るといへとも、亦史の闕文を補ふことなきにあらず」（「批為朝外伝弓張月」）と評しているように、いくら荒唐無稽な物語であっても、史実の範囲を超えてはならないのである。事実、導入部における正儀の降参と結末部における南朝の再興・滅亡について、『桜雲記』『足利治乱記』『細々要記』などの史書に基づいた記述となっている。つまり、犠牲死が仇討の完遂という団円へと導く上記二作と異なり、本作では、正元の死とその遺子らによる奮闘が描かれるも、復仇は叶わず、逆に滅亡という史実へと突き進む南朝の悲哀が強調されているのである。ちなみに、本作には百済右衛門太郎義包にも譲豫像が賦与されているが、彼が命を賭すような行動に出ることはなく、作品全体を通した人物造型には至っていない。物語に彩りを添える趣向と捉えるべきであろう。

一方、『常夏草紙』において、父兄の仇を探るべく、「俄行者」に身を窶して大坂を訪れていた丹嶋清十郎（前名は稲城瀬二郎、治部平の次男）は、千日墓で坂逸八郎という剣術師範と出会い、指南を乞う。逸八郎はそれを了承して「掃枝」を渡し、清十郎の妻お夏の「臍帯」を受け取る。逸八郎と別れた清十郎は、興稚丸と間違えられて乞食らに襲われるも、再会したお夏に助けられる（以上、第八）。家に戻った二人のもとに、冥空と名乗る僧侶が般若櫃を背負って訪れ、お夏にしなだれかかる。

怒った清十郎は、冥空[15]が「大月形の大刀につけられたる搦枝の半隻」を所持していることから、「父兄の讐」烏田時主であると知り、斬りかかる。一方冥空は、自分が治部平主従を殺して大月形の大刀と軍用金三百両を奪い取り、藤坂春澄に搦枝を打った者であると語り、清十郎と斬り結ぶが、左肩を斬りさげられる。そこに春澄と戸鎌丹下（治部平の庶兄）が現われ、お夏・清十郎の首を斬り落として韓姫・興稚丸の身替りとし、治部平の罪障（大刀と軍用金を盗み、それらを預っていた春澄の父春行を殺害したこと）消滅のよすがとする。その後、「仇と名告て補二郎（清十郎の兄―筆者注）が、弟に撃れて隠慝の悪報を果しなば、未来は後やすかるべし」と告白するように、冥空は自らの罪障（三百両を着服し、補二郎を死なせたこと）消滅のため、わざと清十郎を挑発したのであった。清十郎にとって冥空は仇ではなかったが、「仇と思ひて撃」ったのは、「豫讓が刺したる衣に等し」い行為であった（以上、第十・十一）。

清十郎は、「兄が撃れし事の始末を、里人等に問にければ、時主が所為とも聞え、或は榧蔵の内蔵五郎春澄といふもの、所為也といふものあれば、仇をいづれと定め難し」と語るように、仇敵が誰であるかを知らなかった。ゆえに、唯一の判断材料である「搦枝」を所持し、かつ治部平殺害を認めた冥空こそ仇敵であると誤認してしまい、真の仇敵である春澄を討つことは叶わなかった。また、これら一連の騒動の原因は、治部進の強盗および殺人にあるため、清十郎が春澄を討つことは道義的に不可能（又敵討になってしまう）であった。つまり、清十郎には犠牲死という選択肢しか残されていなかったのである。ただ、馬琴が「自評」（巻之五）で、

補二郎清十郎お夏等は、みな孝悌貞実にして、誤なし。既に孝貞にして誤なきもの、薄命その志を舒ることを得ず。その身おの〳〵非命に死して恨を黄泉の下に遺すものは何ぞや。是その父の悪報に係れば也。

と述べるように、清十郎の犠牲死は父の罪障消滅にしか働いていない。このことは、お夏・清十郎の首実検における足利義輝の「忽地撃とつて、首級実検に入るゝこと、その謂なし」という言葉からも明らかである。ちなみに、春澄が清十郎の首を落してしまった場合でも、清十郎と同様に又敵討となってしまうため、馬琴は戸鎌丹下という第三者にその役割を委ねることで、それを回避させた。

以上、『秋七草』『常夏草紙』において馬琴は、史実を歪めてしまう危険性を回避するため、あるいは道義に反する行為を阻止するため、仇討の完遂を目的とする小説構成をとらなかった。

ゆえに、仇討が未遂に終わった人間の犠牲死が、団円へと接続することはなく、宿願を果たせずに命を落とす彼らの悲哀が強調される結果となった。そしてそれは、仇討が必ずしも賞賛に値する行為ではないことをも意味しているのである。

四．空虚性の強調

読本[16]が勧善懲悪を旨としていることは周知の通りであるが、特に馬琴は因果応報観に基づき、善人[17]と悪人を厳格に区別する手法をとった。上記四作の読本も例外でなく、豫譲をモチーフとする人間は、徹頭徹尾「善」なのである。ところが、『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の美妙水冠者義高と『占夢南柯後記』の今市全介には、それぞれ豫譲像が賦与されながらも、その「善」性が首尾一貫しているわけではない。

(1)『頼豪阿闍梨怪鼠伝』

『怪鼠伝』の構造については、石川秀巳[18]氏が詳述しておられるが、本稿では、氏の論考に沿いつつも、「善」と「悪」の問題に焦点を当てて論じてみたい。

源氏同士の対立を愚かしく思い、子息義高を頼朝の婿として鎌倉へ遣わす木曾義仲だったが、望んでいた征夷大将軍に頼朝が任ぜられたと聞いて憤り、「よろづあら〳〵しく言行、俄頃に洛中を乱妨」するようになる。義仲を宥めるべく勅使として遣わされた猫間光隆は、義仲に嘲弄され、家伝の「金の猫」を取られた後、自害する（以上、第一・二套）。仇敵義仲を狙っていた弟光実は、彼が粟津が原で石田太郎らによって討死したことを受けて失望するが、「その子を撃ば、志をいたすに庶し」と、義高を狙う（第三套）。一方、大姫らの手引きにより鎌倉を脱出した義高は、乳母唐糸らと再会するも、堀江光澄によって殺害されてしまう。しかし、それは義高ではなく、幼時に取り替えられていた唐糸の子息大太郎であった。大太郎として育てられていた真の義高は、「父の仇人を撃ん」ことを決意する（以上、第四・五套）。

ここまでの展開から考えれば、義高は仇敵頼朝を討つべく奔走する義士であり、「善」に位置付けることができる。しかし、物語の中盤以降、「善」であるはずの義高が「悪」へ、それとは逆に頼朝が「善」へと変貌する。その要因は、①頼朝の徳②妖鼠の術③性格の変化、の三点に集約される。

①頼朝の徳

第十二套、石田らを討取った義高は、「当の敵頼朝も、遠からずして復かくのことくなるべし」と、頼朝への復仇を誓う。ところが、宇野行氏夫婦の霊に諫止される。

- わが君目今、石田太郎主従を撃給ひぬれば、復讐の本意遂給へるに、なほ頼朝卿をも打滅し、おん父義仲朝臣の志を継んとし給ふは、究めてよろしからず。
- 為久こそ憎みてもなほ憎べきの仇なれ。鎌倉殿は、平家の悪逆を討て宸禁を休め、勅命を稟て先君を追討し給へるものを、これをさへ仇として、狙撃んと計り給はゞ、反逆の罪脱れがたけん。加称頼朝卿は、武運めでたくおはすること、いにしへにもその例を聞かず。

石田らを討ち取り、「復讐の本意」を成し遂げたのだから、今更頼朝を討つ必要はなく、仮に「武運めでた」い頼朝を討つならば、「反逆の罪」は免れない、というのが行氏の主張である。行氏は、義高が頼朝を狙う場面にも再び登場し、「鎌倉殿の時運高大にして、宿志を遂給ひがたし」と頼朝の徳を強調する。つまり、「平家の悪逆を討つ」ほどの強大な存在である頼朝に比すれば、義高など微々たる存在でしかないのである。ちなみに、上記のような仇敵の徳を強調することで仇討の根拠を失わせる描写は、原話で豫讓が「前君已寛二赦臣一。天下莫レ不称二君之賢一」（前に君已に臣を寛赦せり。天下君の賢を称せざるは莫し）と、襄子の寛仁大度を称えたことから想を得たものであろう。

②妖鼠の術

第十二套、頼豪阿闍梨の怨霊と邂逅して「妖鼠の術」を授かった義高は、術を駆使して石田太郎を討とうとする。その時石田は、

> 穢きかな美妙水冠者。義仲の滅亡は、武威に誇て一天の君をおそれず、その暴逆平家にも超たれば也。…縦恨あるにもせよ、などて名告かけて勝負は決せず、刃を飛して腕を折かし、進退自由ならざるを撃んと謀るは、勇士のせざる所也。

と述べ、義高の「勇士」にあらざる「穢き」手段を痛烈に非難する。行氏も、「君は邪法をもて、人を眩惑す」と指摘する。これについて馬琴は自評で、平将門の幻術を例に挙げ、「夫己を脩、人を征するは、徳にあつて術にあらず」と評している。事実、「金の猫」の発した光によって義高の妖術は破られる。つまり、目的を遂行するためには、妖術ではなく徳を以てすべきなのである。また、本[20]作のような妖と徳の対立は『四天王剿盗異

録』を嚆矢としている。義高と同様、袴垂保輔は、道魔法師から授かった妖術を駆使して悪行を重ねるも、淫酒の禁を破ったがために力を失う。単純には比較できないが、「妖」を以て跳梁する人間は、「徳」を備えた人間に屈するという末路を辿るのである。

③性格の変化

前述したように、仇敵頼朝を狙う義高は、光実の仇敵として狙われる存在でもあるが、その原因は光隆を自害に追い込んだ義仲の「あら〳〵し」さにあった。第七套、頼豪は義高に妖術を授ける際、「われは白河の御宇に憤死し、義仲は後白河院を恨り。このゆゑに、わが霊ながく義仲に憑りて、その心ざまをあら〳〵しくし」と語り、自身の怨霊が憑依したことにより、義仲が「あら〳〵し」い性格になったことを明かす。そして、その「あら〳〵し」さは、怨霊が憑依した義高にも受け継がれる。このことは、「直に鎌倉の営中にしのび入り、頼朝が首を揉断て、孝養に備ん事、瞬のうちにあり」という義高の発言や、それに対する「血気の勇」という頼豪の評価から窺える。光実自身は「その子を撃ば、志をいたすに庶し」と発言しているが、馬琴は頼豪の怨霊憑依を通じて、義高を義仲に重ね合わせていたのである。

上記の理由から、義高は頼朝という強大な存在に反旗を翻す「悪」となり、仇討の根拠は失われることとなった。ゆえに、結末部において重忠は、「豫讓が故事に倣」い、「鎌倉殿の狩衣」を刺すことで、行き場を失った義高の「心やり」とさせる。怒った義高は狩衣を投げ返すが、中から大姫の首が出てくる。重忠は、孝と貞との板挟みで自害した大姫の首で以て、頼朝の身替りとしたのであった。[21]事情を知った義高は「狩衣を数回刺徹」し、「両の目子をくり出し」、「無絃法師」と改名する。義高が盲目の法師となるという結末は、馬琴が自評で明かすように、景清説話に拠るものであろうが、大姫の犠牲死によって、原話における自害が回避されたと言えよう。

前述したように、豫讓は襄子の寛仁大度によって仇討を断念したわけだが、襄子の「子之為二智伯一、名既成矣」（子の智伯の為にするは、名既に成れり）という言葉からもわかるように、豫讓の忠義心は大いに讃えられていた。それとは逆に、本作では、義高を妖術を駆使して「武運めでた」い頼朝を狙う「あら〳〵し」い反逆者へと変貌させることで、仇討という行為の空虚性を強調したのである。

(2) 『占夢南柯後記』

序文に「書賈木蘭堂、常南柯夢の続編を版せんと請」とあるように、『占夢南柯後記』は、[22]『三七全伝南柯夢』の好評に気をよくした書肆榎本平吉の懇望に応じて執筆された続編である。それゆえ、[23]登場人物や時代設定など、多くの点で前作を踏襲している。本稿でとりあげる今市全介も、全八郎の子息という設定で登場する。

乳母晩稲から父の最期を聞いた全介は、赤根半之進を父の仇と思い込んで仇討に出ようとする。しかし晩稲は、父が討たれたのは「天罰」であり、もし半之進を殺すことになれば、「亡父の悪事」が露顕するばかりか、全介自身も「善人を撃悪人」となってしまうとして、これを諌める。全介は晩稲の言葉に従って逸る気持ちを抑え、「豫讓が旧衣は買とも、仇人の施物を、やは受ん」と、「赤根が名簿を二たび三たび刺つらぬ」くことで、仇討に代える（以上、「冬田の晩稲」）。

晩稲の言葉が示すように、全介の父全八郎は、幼君を誑かして公金を横領した悪臣で、半之進に殺害されたのも悪事の報いであった。ゆえに、全介の仇討は道義的に認められるものではなかった。

一度は断念した全介だったが、仇討の志已みがたく、半之進が主君続井順勝の命によって宝剣風流子を掘り出すべく米谷山を訪れていたことを知り、彼を乗せた「轎子」を鉄砲で撃つ。ところが、中にいたのは半之進ではなく、晩稲だった。瀕死の晩稲は、自身の傷が鉄砲玉によるものではなく、全介の仇討を止めようと、自ら喉と乳の下を突いたことを明かし、絶命する。全介は、「唐山の豫讓とやらんは、知伯が為に衣を刺て、怨を復せし例を思へば、われも今半之進が、轎子を打くだきつ。怨を復すに擬ぶべし」と、半之進の「轎子」を壊したことで仇討に代え、自害しようとするが、そこに現われた四五六に止められる。四五六は「こゝにて死ば狗死也」と、自害が無益なることを説き、「われにひとつの計較あり。母御の志に悖らず、和主が望を果すべし」と、仇討に代える方法を教える（以上、「木末の点滴」）。その方法とは、宝剣を掘り出し、奪い取ることで、半之進に宝剣紛失の罪を被せるというものであった。ところが、掘り出された宝剣は、「魔風」によって西へ飛び去ってしまう（以上、「米谷の衍塚」）。

父の悪業と乳母を自殺に追い込んだ報いにより、全介の仇討は悉く失敗する。これは、『怪鼠伝』の義高と同様、全介を「悪」に位置付けているためと言えよう。しかし、予期せぬ人物の擁

護により、空虚な仇討は、その命脈を保つこととなる。

全介と四五六は、周防国氷上にある祖父同樹の家を訪れる。全介が悪事に長けていること（「生得たる奸雄者」「術に妙ある」）、半之進とともに半七をも憎んでいること（「養母の遺言黙止がたくて、今に半之進を撃ずといへども、彼（半七―筆者注）も又仇人の半体」）を知った同樹は、半七を討つ計略を授ける（以上、「暑の夏の花の下」）。計略通りに半七を追い詰めた全介だったが、半七の姉お通が投げた「笄」を下駄で受け止め、一時退散する（以上、「天神川の淙」）。その後、全介は「笄」を証拠にお通を脅し、半七と斬り合うも、そこに現われた陶五郎隆春に止められる。陶五郎は、槐姫を連行するため、厚倉隼人を呼ぶ。彼こそ四五六であった。隼人は槐姫の首を打ち落とし、恩賞を蒙る。それを見た全介は、父の仇討を願い出るが、「復讐には、式作法もあるべきに、当の敵を撃ずして、その子を撃事やはある」と陶五郎に難じられる（以上、「槐樹の手斧」）。

同樹の手引きによって半七を狙う全介だったが、これまでと同様に失敗を重ね、挙句の果てには、陶五郎によって仇討の空虚性をも指摘されてしまう。ただ、ここで注意したいのは、陶五郎に論難された後の全介の処遇である。陶五郎は、「復讐なりなんど、いひこしらへ、名を取り禄を貪んと謀る、癖者にてぞあらんずらん」と言い、全介を捕縛しようとしていた。ところが、隼人の擁護によって救われる。つまり、米谷山の場合と同様、全介は隼人に命を救われ、仇討の機会を与えられたのである。ちなみに、一度目の失敗の後、乞食に襲われた全介だったが、その時も隼人に救われていた。まさに、全介の運命は隼人が握っていると言っても過言ではないだろう。これは一体何を意味しているのか。以下、結末部を辿りつつ、考察を進める。

半七は許婚のお花とともに、雨乞いの法会が行われる拈華庵を訪れる。そこに合歓の花桶を持った隼人が現われ、半七は「姫の讐」と言って斬りかかる。隼人が花桶で受け流すと、中からお花に似た女性の首が出てくる。また、半七を追って隠れていた全介が竹槍でお花を突くと、その姿は消え失せる。すると隼人は、お花を槐姫の身替りとしたことを明かす（以上、「合歓の花桶」）。隼人の話を聞いていた全介は、「仇に与せる四五六の隼人友善、妨せば目にもの見せん。半七もろ共刃を受よ」と罵り、隼人を半七の仲間として討とうとするが、そこに現われた半之進に制止される。半之進は、全介が全八郎の子息ではなく、順勝が笠屋小夏に産ませた嫡男であると指摘し、順勝の命によって全介を順啓と改名させ、晴賢討伐の大将軍として順勝恩賜の小刀を与える。以前、順勝から宝剣探索の命を受けた際、半之

進は順勝の血付きの小刀を「形代」として、宝剣を掘り出すことにしていたが、その小刀は若党丹三に預けていた。全介が鉄砲で駕籠を撃った後、丹三は全介に殺されるのだが、その際、小刀で全介の肩先を斬りつけていた。それを拾った半之進は、「主君の鮮血」[21]と「壮佼（全介―筆者注）の鮮血」が「ひとつに聚」ったことを確認し、それを「親子の証据」と判断したのである。半之進の話を聞いた全介改め順啓は、「大息吻て形を更め」、半之進親子を討とうとしたことを後悔する。また、隼人は当初から全介が順勝の「落胤」であると踏んでおり、その「証据」を探るため、「仮初」に「復讐の助太刀」をしていたのであった。それを聞いた順啓は、夢中に「あやしき人」が現われ、「軍法剣法弓馬」や「読書手蹟」を学んだことを語るが、それは祖父順昭が信仰していた「志貴の毘沙門天」の「擁護」であった。その後、順啓は室町将軍から大和介に任ぜられ、晴賢討伐に向かう（以上、「柴樗の雨笠」）。

素性を掴んでいたにもかかわらず、隼人は全介に空虚な仇討を繰り返させたのだが、それは「仮初」に「復讐の助太刀」をしていたに過ぎず、順勝の「落胤」である以上、その証拠を掴むまでは、どうしても全介を生き延びさせる必要があった。つまり、仇討自体は空虚な行為だったものの、隼人の「助太刀」が全介の続命に繋がったのである。また、順勝と全介の血が融合し、真に順勝の血を引く存在であることが判明するが、それにより、順啓は全八郎の因果から断ち切られ、「悪」から「善」へと変貌を遂げた。

父の悪業の報い・母を自害させた報い・仇敵の誤認と、失敗するたびに、全介の仇討はその根拠を失っていった。そして、自身が全八郎の子息ではなかったという事実が決定打となり、仇討が空しい行為であったことが証明されたのである。

以上をまとめると、『怪鼠伝』では、妖術を駆使して頼朝を狙う義高を体制に反逆する存在とすることで、『南柯後記』では、全介を全八郎ではなく続井家当主順勝の嫡男とすることで、その空虚性を強調したのである。

五．二つの「誤り」

馬琴は読本において、豫讓をモチーフとする人物造型を繰り返していくなかで、仇討の正統性を否定し、逆に空虚性を強調していくようになる。その背景には二つの「誤り」があった。一つは仇敵の誤認、もう一つは手段の誤用である。そして、こ

れらの要素を踏まえて造型されたのが、『南総里見八犬伝』の犬山道節である。道節は、主君煉馬倍盛が滅ぼされたこと、その戦いで父道策を失ったことを恨み、扇谷定正を「君父の讐」として狙う。しかし、都合三度の仇討は悉く失敗に終わる。以下、その要因を上掲の二点に則して考えたい。

①仇敵の誤認

『怪鼠伝』における頼朝、『秋七草』における義満は史的に強大な存在で、一個人の仇敵とするには問題があった。道節が「君父の讐」として狙う扇谷定正も同様で、山内顕定とともに鎌倉公方を補佐する関東管領定正を殺してしまうということは、史実を歪めることと同義である。ただ、道節に討つべき仇敵がいなかったわけではなかった。

初度の仇討で道節は、定正が上州白井に在城していることを知って潜入。定正の首を斬ったと思いきや、その男は「仮管領」で、池袋の戦いで主君倍盛の首を刎ねた越杉駄一郎遠安であった。一旦城を脱出した道節は、遠安の首を取りに戻る。するとそこに、父を殺した籠門三宝平という男が現われる。道節は「天の賜」と喜び、三宝平の首を打ち落とした（以上、第四十五回）。犬塚信乃が「君と父とを害したる、越杉籠門両個の仇を、漏さず其首に擒捕て、復讐の義を果せし」（第八十六回）と指摘するように、道節は「君父の讐」である二人を討ち果していた。つまり、道節[26]は二人を殺した段階で仇討ちを完結させるべきであり、ましてや、二度目の仇討では定正の「盃の盃子」を「射摧」き（第九十三回）、三度目[27]には定正の子朝寧を射て「水底に沈」めた（第百七十四回）のだから、執拗に定正を狙うのは望ましい行為ではなかったのである。この点については、義仲を殺した石田太郎を討ったにも関わらず、頼朝を狙う義高との類似が認められる。

このように、道節の仇討失敗の一因として、「仇敵の誤認」が挙げられよう。ちなみに、『怪鼠伝』『八犬伝』の場合と状況は異なるが、『常夏草紙』の清十郎、『南柯後記』の全介も仇敵を誤認していたことには相違ない。

②手段の誤用

もうひとつの要因は「手段の誤用」である。『怪鼠伝』で義高は妖鼠の術を駆使するが、それは「邪法」であり、「勇士」のするべきことではないと非難されていた。また、妖術ではないが、『南柯後記』[28]で全介が駕籠に乗った半之進を鉄砲で狙撃すること、同樹の計略で半七を騙し討つことなどは、もはや悪人の所

行である。このように、道義[29]に反する方法で仇討を成し遂げようという姿勢は、道節にも見受けられる。

第二十八回、道節[30]は異母妹の浜路と邂逅したとき、自分が「寂寞道人肩柳」という「仮修験」として「火遁の術」を駆使し、「火定」と偽って、人々から金銭を騙し取っていたこと告白する。その際、この「火定の詐欺」が「左道」で、「勇士の行ふべきもの」ではないとを認識していた。にもかかわらず、「一人の資」もない自分が定正を討つためには金銭が必要（「人のこゝろを結んには、金銭にますものなし」）で、それを集めるためには「左道」であっても已む無しとの姿勢を見せるのである。

また、浜路から村雨丸を預かった道節は、彼女の願い（滸我にいる信乃に渡すこと）を「私事」として聞き入れず、「忻よつて一ト刀に、怨を復」そうと決意する（第二十九回）。その言葉通り、「大出太郎」という偽名を使って白井城に潜入。母親のために宝刀を売りたいと偽って定正の関心を惹き、騙し討つのである。本文中にその是非は語られていないが、これも「勇士」にあらざる行為と言えよう。このような行為は、二度目の仇討にも見える。

八犬士の一人犬阪毛野が、河鯉守如の助力によって仇敵籠山逸東太を討つことに便乗し、道節は二度目の仇討を実行するも、兜を射ただけで定正を逃がしてしまった。逸る道節は「捕な逃しそ」と、さらに追いかけようとする。しかし毛野は、守如を「不忠の人」にしてしまうとして、「推禁め」る。ここで定正を討ってしまうと、守如が定正を討たせるために寝返ったことになってしまい、毛野からすれば守如に対して義が立たないのである。毛野の説得により、道節がこれ以上定正を追うことはなかったが、守如は主君を城から追い出してしまったことなどを悔いて自害する。

このように、道節は「手段の誤用」によって仇討を失敗するばかりか、道義に反する行動によって、周囲に災厄をもたらしてしまうのである。ちなみに、『常夏草紙』で清十郎が春澄を討つことはなかったが、前述のように、仇討を実行していれば、道義に反する行為となっていたであろう。

おわりに

以上、馬琴読本七作における豫讓の故事を分析してきたが、それによって得られた知見を整理しておこう。馬琴は当初、義士として著名な豫讓の故事を読本に摂り入れていくなかで、原話を逆手に取り、豫讓像が賦与された人間の犠牲死を契機とし、

結末部において、彼らが成し得なかった仇討を、別人の手に委ねることで完遂させた。しかし、原話の悲哀性が損なわれたためか、『秋七草』『常夏草紙』では、未遂に終わらせることで悲哀性を強調するとともに、仇討に空虚性をもたらした。その際、仇討を果たすことのできない明確な理由を設けるなどの工夫を施した。さらに、『怪鼠伝』『南柯後記』では、豫譲像が賦与された人物を「善」から「悪」、「悪」から「善」へと変貌させることで、空虚性を強調することにも成功する。そして、この空虚性は「仇敵の誤認」「手段の誤用」の二点に集約でき、この要素を用いて、馬琴は『八犬伝』の犬山道節を造型したのである。

さて、馬琴は読本の人物造型において、豫譲[31]のようなモチーフを繰り返し利用する傾向にあるが、作品の主題・内容によって、その利用態度が大きく異なっていることがある。本稿では、その実相の一端を指摘し得たと思う。今後、このようなアプローチをもとに、馬琴読本の人物造型について、引き続き検討を重ねていきたい。

〔注〕

(1) 拙稿「曲亭馬琴〈巷談もの〉読本における身替り—演劇的趣向から小説的機能へ—」(『日本文学』60-12、二〇一一年十二月)。

(2) 濱田啓介「秩序への回帰—許嫁婚姻譚を中心として—」(横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集『日本のことばと文化—日本と中国の日本文化研究の接点』溪水社、二〇〇九年十月)。

(3) 馬琴読本における豫譲の故事については、徳田武氏が『馬琴京伝中編読本解題』(勉誠出版、二〇一二年三月)で多く指摘している。

(4) 例えば時代物の浄瑠璃では、忠臣の鑑としてたびたび引用される(『ひらかな盛衰記』第三、『伽羅先代萩』第四など)。

(5) 該書を翻訳した通俗軍談に『通俗呉越軍談』(清地以立訳、元禄十六年刊)、『通俗列国志』(同、宝永二年刊)がある。

(6) 以下、豫譲の故事の引用は、すべて『史記評林』(寛政元年刊、関西大学図書館蔵)による。ちなみに、『曲亭蔵書目録』「し部」には、「史記評林　合巻　五十冊」とある(日本古典文学影印叢刊32『近世書目集』日本古典文学会、一九八九年十月)。

(7) 引用は、大阪府立中之島図書館蔵本(宝永四年刊)による。

(8) 以下、馬琴読本の引用は、注記するものを除いて、すべて『馬琴中編読本集成』（汲古書院）による。

(9) 大高洋司氏は、「『優曇華物語』と『曙草紙』の間」（『京伝と馬琴―〈稗史もの〉読本様式の形成』翰林書房、二〇一〇年五月）で、当該場面について、京伝の『優曇華物語』第二段を踏まえつつ改変・発展させたと指摘する。

(10) 注3前掲書。

(11) 大屋多詠子「勧善懲悪―馬琴読本と演劇を中心に―」（『江戸文学』34、二〇〇六年六月）。

(12) 引用は、日本古典文学大系60『椿説弓張月』上（岩波書店、一九五八年八月）による。

(13) 巻之一冒頭で馬琴は、数種の史書を典拠として明示している。

(14) 注3前掲書。

(15) 清十郎は、「坂逸八郎とか名告る、武芸の達人に撞見しとき、そのもの、腰刀に、この締枝の半隻を著たれば…彼逸八郎は疑ふべうもあらぬ、内蔵五郎春澄にて、すなはち汝が支党ならん」と述べ（第十）、逸八郎は春澄ではないかと疑っていた。

(16) 中村幸彦「滝沢馬琴の小説観」（『中村幸彦著述集』一、中央公論社、一九八二年十一月）、濱田啓介「「勧善懲悪」補紙」（『近世小説・営為と様式に関する私見』（京都大学学術出版会、一九九三年十二月）、注11前掲稿、黄智暉『馬琴小説と史論』（森話社、二〇〇八年十二月）など。

(17) 大高氏は、「京伝、馬琴と〈勧善懲悪〉」（注9前掲書）で、馬琴の手法を〈善人／悪人〉型とし、京伝の〈善悪一如〉型と対立する構図にあると指摘する。

(18) 石川秀巳「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論序説―稗史的世界の基底―」（『山形女子短期大学紀要』18、一九八六年三月）、「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論―稗史的世界の構造―」（『読本研究』一、一九八七年四月）。

(19) 実際に頼朝を狙うのは唐糸だが、彼女は頼朝に迫るも、討つこと叶わず、捕縛されてしまう（第十一套）。これは、徳田氏が注3前掲書で指摘するように、『唐糸さうし』における唐糸、『史記』刺客列伝における豫讓・荊軻の逸話を融合させたためである。しかし、義高が豫讓像を賦与された人物と捉えるならば、唐糸にその役割の一部が委ねられたと考えられるのではないか。

(20) 大高洋司「馬琴読本の一展開―『四天王剿盗異録』とその前後―」（『近世文芸』39、一九八三年十月）。大高氏は、『椿

説弓張月』残編―第五十九回の「妖は徳に勝ず」という成語に着目し、「『椿説弓張月』の続刊と並行して用いられはじめた形跡がある」とも指摘している。

(21) 光実の仇討は、畠山重忠によって「無名の闘戦」と指摘され、その根拠を失った。ために、義高と同様、唐糸の身替りを受け、「木曾殿の兜」を刺すことで、それに代える。

(22) 馬琴は『近世物之本江戸作者部類』巻二之上「曲亭主人」で、「南柯後記は南柯夢の板元榎本平吉が好みに侭して、この作編あり。作者の本意にあらずといへども、看官の喝采、又前板に劣らずといふ」とも述懐する。引用は、木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』(八木書店、一九八八年五月)による。

(23) 「この条は、前編南柯夢、第六巻のをはり、享禄元年十二月七日の夜、赤根半六敷浪等が、千日墓にて枉死せし以後、凡二十三ヶ年の事どもをかい摘て記すものなり」とあるように、冒頭の「南柯の接木」では、『南柯夢』の結末以降、二十三年間に起こった出来事が記され、本作の導入となっている。

(24) 播本眞一「『南総里見八犬伝』と馬琴合巻」(『八犬伝・馬琴研究』新典社、二〇一〇年三月)、注3前掲書。ちなみに、両氏が指摘する作品のほかに、『奉加助太刀』(文化六年刊)、『毬唄三人長兵衛』(同十三年刊)、『鶴山後日噺』(同十四年刊)の合巻三作にも、この趣向が利用されていることを指摘しておく。

(25) 第二十八回以降、道節はたびたびこの言葉を使う。以下、『八犬伝』の引用は、濱田啓介校訂『新潮日本古典集成別巻南総里見八犬伝』(新潮社)による。

(26) 仇討を果したにもかかわらず、さらに別の人間を狙う行為について馬琴は、「八犬伝八輯默老評答」(天保三年成・早稲田大学図書館蔵)で、「曽我弟兄(ママ)が、父の讐祐経を撃たれども、なほいまた足れりとせず、頼朝卿はその大父祐親の仇なればとて、又これをしも撃まくせしは、彼北條にそゝのかされたる、只是一時の惑ひのみ」と、曽我兄弟の例を挙げて非難している。引用は、早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇31『馬琴評答集 五』(早稲田大学出版部、一九九一年九月)による。なお、引用に際し、適宜濁点・読点を付した。

(27) 失敗後も定正を追いかけようとする道節に対し、荒川清英・印東明正は「既にこの春高畷にて、那人の頭鎧を射て落して、怨を復し給ひしに候はずや。然るを又今日は其子朝寧を、遠箭に被て射給ひしは、事十二分の首尾なるに、飽ずや敵地に深入して、夜を犯しつゝ還ることを、忘れ給ふは甚麽

ぞや」と諌める。

(28) 悪人が鉄砲で暗殺する趣向は、『島村蟹水門仇討』(文化四年刊)、『敵討白鳥関』(同五年刊)、『毬唄三人長兵衛』(同十三年刊)などの合巻作品に多く見受けられる。

(29) 高橋京子「『仮名手本忠臣蔵』における勘平の切腹と『南総里見八犬伝』における犬山道節の仇討ち失敗の原因」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』5、二〇〇〇年三月)。

(30) 服部仁「寂寞道人肩柳(犬山道節)の出自」(『読本研究新集』4、翰林書房、二〇〇三年六月)。

(31) 例えば、三宅宏幸氏は、「犬江親兵衛の初陣」(『同志社国文学』67、二〇〇七年十二月)、「『椿説弓張月』と聖徳太子伝承—琉球争乱を中心に—」(『近世文芸』94、二〇一一年七月)で、『弓張月』の舜天丸と『八犬伝』の犬江親兵衛の人物造型に際し、聖徳太子をモチーフとしていることを指摘している。

(なかお　かずのり／本学非常勤講師)